



日本赤十字看護学会への期待

日本赤十字学園 理事長

日本赤十字看護大学附属災害救護研究所 所長 富田 博樹



とみ た ひろ き
富 田 博 樹
日本赤十字学園 理事長

略歴

昭和 48. 3 東京医科歯科大学医学部卒業
平成 20. 1 武蔵野赤十字病院 院長
平成 24. 4 日本赤十字社 事業局長
平成 28. 4 日本赤十字社 医療事業推進本部長
平成 31. 4 日本赤十字社 顧問
令和 1. 7 日本赤十字社 副社長
令和 4. 7 日本赤十字学園 理事長

今年の6月末に副社長を退任し、7月1日より、理事長であられた大塚義治名誉社長の後を継ぎ、日本赤十字学園 理事長に就任いたしました。6看護大学7看護学部1短期大学を擁する学校法人の運営にあたることになりました。今後少子高齢化が進む我が国において、単科私学大学の運営は容易ではありません。各大学の学長と力を合わせて、『赤十字看護』の発展のため、尽力してゆく所存です。また、コロナ禍において赤十字精神の元、大きな苦難にもかかわらず積極的に対応くださった本学会のみなさまに、敬意を表したいと思います。

さて、日本赤十字看護学会は創立21年の歴史を持ち会員数は、千人を超えていると伺っております。役員は創立当初の大学主体から、近年医療機関からも選出されており、本年度の学術集会は清水赤十字病院の大沼まゆみ看護部長が会長を務められたとのこと、まさに全日赤による学会活動となっていることに、頼もしさと共に大きな期待を持っております。

『赤十字看護』が赤十字病院の最も重要な支柱であることは、万人の認めるところです。私も武蔵野赤十字病院に約30年勤務して、看護師の誠実さ、患者の立場に立ちつづける意志の強さ、そして新しい医療看護に積極的に取り組む姿に、畏敬の念を持ち続けています。この思いは他の赤十字病院長たちもほぼ同じでした。まさに人道の実践者であり、日本赤十字社の精神性のバックボーンとなっています。赤十字看護大学6校の各学長は、看護教育界で著名な実力者が多く、質の高い看護基礎教育を実践しています。一方赤十字病院では、我が国では先進的な取り組みとして看護師キャリア開発ラダーを導入し、理想の赤十字看護像を掲げ、それに達すべく、全看護師が取り組んでおり、現在約70%の看護師がラダーを取得しています。大学の基礎教育と病院のラダーがシンクロすることにより、優秀な赤十字看護実践者を養成できる体制が整っています。さらに、臨床現場でのさまざまな知見をまとめ、研究する場としての大学、研究所（災害救護研究所）の活用により、『赤十字看護』はさらに輝くことができると思っています。

最後に、貴学会への期待を述べよとのことですので、21年前の学会発足時に開催された第1回日本赤十字看護学会学術集会シンポジウム『21世紀の赤十字看護教育』、座長：川島みどり、シンポジスト：稲田美和（日本赤十字看護部長）、中西睦子（神戸市看護大学学長）、樋口康子（日本赤十字看護大学学長）に貴学会への期待が込められています。21年前のご意見ですが、今でも私は全く同感ですので、ここにその一部抜粋を紹介いたします。樋口学長のお言葉は、ウクライナ人道危機の現状から痛切に響きます。

稲田氏：（前略）．[＊] Humanity（人道）。という赤十字の理念は、看護や医療の本質だと思います。赤十字の場合は、赤十字の組織、事業、ネットワークの中で 人道の理念を発揮できると 생각합니다。人道の理念に基づき、看護の分野で社会の要請にこたえる豊かな人間性と幅広い能力を兼ね備えた実践者を養成することや、国際的な視野にたつて、「人道」「尊厳」「公平」「中立」「自発性」「普遍性」などをキーワードに看護を考えたいと思っています。赤十字の看護職の方々には、将来的には地球的規模、グローバルな視点で看護専門職として活躍されることを期待しています。（中略）赤十字は教育・研究機関があります。これは、非常に意義のあることで、今後は看護だけではなく保健や福祉等の幅広い研究や教育を行うために、看護大学が赤十字事業全般の教育・研究機関になって欲しいと思います。赤十字の看護職員は、全員が大学を支え、大学も看護基礎教育だけではなく、継続教育の中心的な機関になって欲しいです。臨床にはすばらしい臨床知をお持ちの方が沢山いるので、それを基礎教育に反映する2-Way方式のやり取りができるとよいと感じています。（後略）．

中西氏：（前略）．是非、赤十字の外側に向かって発信をしていただきたい。赤十字という組織の中では確かにすばらしい活動をされていると思います。しかしそれが日本全体の看護界に向かった活動にはなっていないと考えます。なぜ発信できないかというと、それは赤十字看護のオリジナリティがまだ知的な産物として出来上がっていないからです。赤十字看護の日々の実践は着実に存在しているのです。しかし、それを知的な産物という形を持って日本の看護界全体に呼ばかけて欲しいと思います。（中略）自分達の実績だけを赤十字の中で抱え込んでいるのではなくて、外向きにメッセージを発信していただきたいと思うのです。（後略）

樋口氏：（前略）．第2次世界大戦後、武力を放棄した日本の国に何ができるかを考える時、国連代表として救援活動の先頭にたった緒方高等弁務官が述べられた「日本は人道大国たれ」という言葉を忘れることはできません。（中略）私も、これからの時代における国際的役割などについて再認識し、可能な限り速やかに具体的に行動してゆく必要があると痛切に感じます。（後略）

引用：川嶋みどり・稲田美和・中西睦子・樋口康子：シンポジウム 21世紀の赤十字の看護教育～私たちの構想と私たちの約束、日本赤十字看護学会誌1（1）、9-19、2001-03

日本赤十字社助産師学校100周年を迎えて

日本赤十字社助産師学校 副学校長 近藤 良子

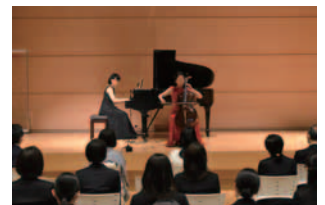
2022年4月2日、コロナ禍ではありましたが、満開の桜の中、好天にも恵まれ本校の100周年記念式典を開催することができました。当日は、新入生の入学式を開催した後、100周年の記念式典を開催致しました。学校長、日本赤十字社前社長挨拶（前副社長代読）に始まり、来賓祝辞日本看護協会常任理事井本寛子氏、日本赤十字看護師同方会理事長竹下喜久子氏、臨床現場からのメッセージ、卒業生や受持ちケースの方からもオンラインメッセージを頂きました。その後、学校の動向をまとめた動画上映、本校同窓会松契会寄贈ミニコンサート・本校イメージソング披露とコロナ禍で規模を縮小致しましたが心温まる式典となりました。

さて、本校は、1922年4月1日、日本赤十字社産院附属の産婆養成所として開校致しました。開校の目的は「我が国における模範的産婆の育成」でした。現在も、この開学の精神は継承しつつも、女性に寄添う健康上の良き支援者となる助産師の養成に努めております。2022年3月までに3195名の卒業生を輩出し国内外様々な方面で助産師として活躍しております。また、2010年専修学校昇格、2019年日本助産評価機構による第三者評価：助産師教育機関適格校に認定されております。

今後、少子高齢化に伴い、助産師教育も学生確保、ケアの対象者の減少という大きな壁が立ちはだかることが危惧されますが、学生及び対象となる女性一人一人を大切にしたい学校運営を目指していく所存です。今後とも皆様方の御指導、何卒よろしくお願い致します。



学校長挨拶



ミニコンサート

大阪赤十字看護専門学校の閉校

大阪赤十字看護専門学校 副学校長 黒岡 多佳子(72回生)

令和5年3月末、113回生の卒業をもって大阪赤十字看護専門学校は閉校いたします。看護大学設立に向けた検討を積み重ねてまいりましたが、現時点での決定事項とはなりませんでした。

大阪での看護婦養成は、明治26年に大阪医学校（現在の大阪大学）の委託から始まります。その後、明治42年、「日本赤十字大阪支部病院救護看護婦養成所」を開設、赤十字の救護看護婦養成が本格的に始まっています。しかし、昭和12年に病院は軍の管理下に入ります。そして戦時体制下で救護看護婦を急ぎ補充するため、昭和16年度から修学年限が短縮され、甲種・乙種・臨時救護看護婦と3種の看護婦養成となり、在籍生徒が1000人を超えた時期もありました。大阪支部は、戦時救護において全国で最も多い1223名の救護員を派遣しています。終戦後GHQに接收され、病院と学校は陸軍の兵舎跡へ移転します。昭和31年に病院が返還された翌年には、木造モルタル造り平屋建ての新校舎2棟が落成しました。（写真）昭和49年には鉄筋3階建ての校舎が竣工、学校は「大阪赤十字看護専門学校」と改称しました。50年近く経過した近年では、内装設備や耐震の問題もあり、閉校の一因にもなりました。

明治に始まった114年の歴史、6527名の卒業生を送り出し、また12名ものナイチンゲール紀章受賞者を輩出していることが当校の誉れです。どうか、赤十字救護看護師育成のあり方をこの先も模索し続けていただければ幸いです。



木造校舎

特集:コロナ禍における新人看護師に対する教育 事例①横浜市立みなと赤十字病院

看護部長 間瀬 照美

自施設では、新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）重点医療機関として重症・中等症患者を受け入れています。コロナ対策と共に新人看護師（以下、新人）教育も柔軟に対応してまいりました。特に、2021年度入職の新人は、臨床実習や他者との交流ができない状況でした。そこで、不安軽減のため入職前にオンラインによる質問会を実施しました。また、入職直後に職場でのコミュニケーションや複数部署の研修を実施し、技術研修では小グループとし、一人ひとり丁寧に指導しました。6月以降は、教育担当師長が新人と共に実践し、成長を承認し、夜勤の自立時期は、例年より1か月伸ばしました。以上の取組み等により、年度末の実践者ラダーレベルI取得と技術到達度、離職率は例年通りでした。新人臨床研修制度導入から10年以上が経過し、各部署の教育力の高まりや柔軟な教育への対応の成果と考えています。

今年度は、入職直後に他己紹介やリフレクションを取り入れ、同期との交流を深め、相談できる関係を早期に構築することや省察することの重要性を理解することから始めています。今後の成長が楽しみです。



特集:コロナ禍における新人看護師に対する教育 事例②大森赤十字病院～職場適応を促すための入職後1か月の支援に焦点を当てて～

看護師長 境 美幸

新型コロナ禍の新人は、臨地実習経験が少ないことから不安が強く、入職後も感染防止のため交流の制限など同期や先輩との関係を深めにくいことが予測された。当院では、新人の入職時の不安を軽減し職場適応を促す一支援として、入職時に“事前確認研修”として新人と先輩が実習状況や不安を共有する場を設けた。また、病棟配属後1か月間は、日勤終了時に“新人同士のカンファレンス”の時間を設け、先輩がファシリテーターとなり経験の意味づけ支援した。このような支援により、新人は同期も同じ不安を抱えていることを知り安心感を得ることができていた。そして、新人同士のカンファレンスは、緊張の緩和に留まらず互いの経験から学び合えるリフレクションの機会となっていることがその後のアンケートの結果からわかった。



入職時“事前確認研修”の様子

入職後1か月のという緊張の強い時期にこのような場を設けることは、新人が病棟の一員となる一歩を踏み出す支援になったと考える。今後も新人と先輩の語り合いの場を大切にしたりリフレクティブな教育環境を創っていきたい。

日本赤十字看護学会2021年度「研究奨励賞」受賞論文 紹介

題目：熊本地震被災地域にある医療施設に勤務する看護師の心的外傷後ストレス障害の実態

著者：黒田 裕美¹⁾、大重 育美²⁾、菅原 直子³⁾、北條 智子⁴⁾、有安 直貴⁵⁾、姫野 稔子²⁾、高橋 清美²⁾、田村 やよひ⁶⁾

¹⁾ 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科保健学専攻、²⁾ 日本赤十字九州国際看護大学、³⁾ 日本赤十字社名古屋第二赤十字病院、

⁴⁾ 一般社団法人訪問看護ステーションちはやACT、⁵⁾ 医療法人勢成会井口野間病院、⁶⁾ 前日本赤十字九州国際看護大学

本研究は、2016年に発生した熊本地震の被災地域にある医療施設に勤務する看護師を対象とし、熊本地震発災約8～9か月後における看護師の心的外傷後ストレス障害（PTSD）の実態及び発災直後に仕事に関することで印象に残った内容を調査した。分析対象は322名であり、PTSDハイリスク者は46名（14.3%）であった。PTSDハイリスク者に、より年齢が高いことや、中間管理者であることが関連した。また、PTSDハイリスク者には本震時に勤務していたことや自宅被害状況が半壊であったことが関連しており、これらを経験した看護師に対する支援の必要性が示唆された。また、災害看護研修の受講経験者にPTSDが少ない傾向があった。災害看護研修の受講は災害時対応のイメージ化を促進することに繋がり、災害時のPTSDへの有効な対策となると考える。（日本赤十字看護学会誌VOL21, No.1, pp.1-9, 2021）

題目：若年成人期に精巣腫瘍の診断・治療を受けた人の経験

著者：遠山 義人（日本赤十字看護大学）

本研究は、若年成人期に精巣腫瘍の診断・治療を受けた人の経験を、当事者の視点から明らかにすることを目的とした質的記述的研究である。若年成人男性3名に各3回のインタビューをした結果、『悪循環から抜け出すががんからは抜け出せない』Aさん、『病気になった自分を受け入れずに苦悩しながらがんとの距離を置ける生活へと向かう』Bさん、『アイデンティティが揺らぎながらも取り戻していく』Cさん、というテーマが導かれた。診断後、彼らは過去と分断され今に留まるような時間経験をし、自ら孤独の世界に巻き込まれていた。さらに、当たり前に来ると思っていた未来を限定され、将来の自己像は崩れ、男性としての自己存在を問う経験をしていた。看護師は、彼らが医療とは異なる時間経験をしていることを理解し支援する必要がある。さらに、治療と関係のない話も取り入れながら信頼関係を築く等、彼らが気がかりや苦悩を語るきっかけを作ることによって、彼らが自己を認め、新たな価値を見出す可能性があると考えられた。（日本赤十字看護学会誌V0119, No.1, pp.1-9, 2019）

第23回日本赤十字看護学会学術集会を終えて

第23回日本赤十字看護学会学術集会
会長 大沼 まゆみ

COVID-19感染症の対応は、新たなステージへと変化しています。

第23回学術集会は、「赤十字看護の未来へーコロナ危機を乗り越えてー」をテーマに教育と臨床のcollaborationを視点に感染対策を実施しながらの開催となりました。特別講演 2教育講演 2シンポジウム口演48題と示説27題、6交流セッション及び特別企画をハイブリッドで配信いたしました。620名のご参加を得て会員相互及び赤十字以外の参加者との交流が実現しました。特別企画では活動の実際から新興感染症への備えを教育・医療・介護・福祉それぞれの立場で議論し多くの示唆を得ることができたと感じております。感染対策を実施しながらご参加頂きました皆様に厚くお礼申し上げます。



第24回日本赤十字看護学会学術集会に向けて

第24回日本赤十字看護学会学術集会
会長 高橋 純子

この度、第24回日本赤十字看護学会学術集会会長を拝命いたしました高橋と申します。今回は2023年7月29日・30日に宮城県仙台市において、集合形式で開催いたします。学術集会のテーマは「赤十字看護の伝承と躍進」とし、赤十字看護を礎に現在の不確実な時代にも躍進し続けるために、皆様と知見を深めたいと考えております。井上忠男先生による人道をテーマにした基調講演や賀来満夫先生の感染症に関する特別講演のほか、東日本大震災の語り部の講話など石巻らしいプログラムも準備しております。赤十字学会員が一堂に集い学びあう貴重な機会に、ぜひ仙台に足をお運びください。企画委員一同お待ちしております。



NEWS LETTER The Japanese Red Cross Society of Nursing Science Vol.20, 2022.

日本赤十字看護学会ニュースレター 第20号 2022年12月発行

- 発行 日本赤十字看護学会 広報委員会
東京都渋谷区広尾4-1-3 日本赤十字看護大学内
- 学会ニュースレターは学会ホームページからダウンロードできます。
<https://plaza.umin.ac.jp/jrcsns/publication/>
- 学会ニュースレターに関する皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。
hara@rcakita.ac.jp
t-takeuchi@rctoyota.ac.jp までお願いします。

●編集後記

2022年も新型コロナウイルス感染の波が、第6、第7、第8波と訪れ、コロナ禍も3年目となる中、経済活動が加速されwithコロナに舵が切られました。日本赤十字社では社長、副社長、日本赤十字学園の理事長が交代され、新たな時代が始まりました。本レターでも、時代の変化を見据え、赤十字の教育、研究、実践のニュースをお届けしました。（原 玲子）